

## 学校教育と市民社会

女子短期大学部 柳 生 和 男

### はじめに

「子供は未来からの留学生」であるとよく言われる。保護者は勿論のこと、私達教師を含めた市民社会全体でこの子供達に豊かな「お土産」を持たせて未来社会へ帰してやらなければならないと考えるのは誰もが同じであろう。

従って、子供の教育は決して学校だけが担うものではない。また、保護者と子供といった家族単位に限定した個人的な作用であってはならない。なぜならば、未来社会はすべての子供達が共有する社会であり、個人的なものではないからである。たとえ一人の子供の成長と発達であっても、それは社会の関心事そのものであると考えるのが自然である。

しかしながら、こうした当たり前と思われることが現実の子供の姿を通して見ると、青少年による犯罪の増加、児童生徒の問題行動の増加、不登校、いじめ、対教師暴力、学級崩壊、虐待等々、学校や社会には数え切れないほどの課題が山積みとなっている。

もはや家庭や学校だけでは到底解決の図れない複雑で深刻な問題が徐々に増えつつある。

従って、子供の幸せを保証するためには、家庭や学校頼みと言った従来の手法によるだけでなく、社会による何らかの介入が必要とされ、そのコストも膨大なものになっていくことが予想されている。

今、学校やその周囲でも「教育がおかしいぞ」いった声が聞かれる。しかし、おかしいのは教育であろうか。学校であろうか。このことについては何度も検証し、ならば「どの部分がおかしい」のかを明確にしていかなければならない。

子供達の姿が大人の姿を写すことは昔からよく言われてきたことである。例えば、「この親にしてこの子」「子を見れば親の顔が見える」などは代表的な諺として知られている。従って、子供達がおかしいのか、学校がおかしいのかを論議するとともに教師を含めた大人社会、つまりここで言えば市民社会そのものについても考えるとともに、子育てネットワークのそれぞれの立場からの提言や企画、時には介入による是正への試みを行うことが私達に課せられた責任ではないかと考えている。

文化は社会を構成する一人ひとりが最も安易なところで了解する事項の集合であると

考えるならば、学校が抱える数多くの問題も、社会が容認してきた了解事項の一部分にすぎないということになりそうである。

生徒の喫煙、校内暴力、不登校、いわゆる学級崩壊等の問題も市民社会の持つ了解事項、つまりこれらの問題と地域の文化とは親子関係ほどに接近した関係にあると考えられる。中高校生が煙草を買う姿は最近では珍しくない。その光景を見ても大人達は無関心を装うし、販売店が道義的な非難を市民から受けることもない。小学生も最初はびっくりにして先生に報告しても度重なれば日常の出来事として馴染んだ光景になる。

やがて自分がその行為に興味を持った時には彼の心の中の閾値、つまり規範というハードルは一般の通念よりもより低くなっている。そして、彼は彼の住む市民社会の了解事項として存在する低いハードルを跳ぶことに何の疑問も抱かず、堂々と喫煙する中高生へと成長するのである。

市民公開講座では、学校の目から見た市民社会について言及し、熱心な聴講で手応えのある機会を得ることができた。市民社会が持つ文化の成り立ち、市民社会の文化と生徒指導、児童生徒理解に関する了解事項の揺らぎ、学校の目線で見た地域社会、学校が抱える諸課題、例えば、教職員の高齢化や訓練されていない若年教師群、保護者の自己中心化の進行等については特に詳しく触れた。

そこで、ここでは講演の中で触れた「いわゆる学級崩壊」について講演の内容を補足する目途で言及してみたい。

## 1. 学級崩壊の背後にどんな心の問題が見られるか

学級崩壊に関する本論の全体を通して次ぎの項目をポイントとして先に提示しておきたい。

- ① 学校が抱える児童生徒の諸問題を教育における機能不全症候群とするならば、学級崩壊は教育における多機能不全症状であり。教育の一時的な死を意味する。
- ② 学級崩壊は児童生徒の民主主義的人格形成を阻害し、重大な暗い影を落とす。
- ③ 状況の的確な把握、原因の究明、到達目標の明確化、対策プログラムの作成とそれに基づく実践、学校全体での支援体制、学校のスリム化が解決への必須条件である。
- ④ 学級の実態に応じた総合的学習をいかに創意・工夫を生かして効果を上げるか、各学校がこれを絶好の機会と捉えるかが学級崩壊拡散抑止の岐路となる。

## (1) 学級崩壊とは

俗な表現を借りれば、教師の思い通りにならない児童生徒が増加している。学級崩壊は中・高等学校に起こる問題として捉えられていた。しかし、ここ数年は小学校の低学年においても起こる現象として捉えられている。「思い通り」とはすなわち教師と子供の間で教授・学習が成立しない、教師の指示が伝わらない、気持ちや愛情の往来が成立しないことを指す。

入学したばかりの小学1年生が、従来ならばベテランの教師によって、概ね5月の連休明けの頃までには幼稚園を脱皮し、小学校の色彩へと成長したものが、最近では2学期の半ばになってようやく落ち着いたといった例や、教師の言うことを聞かない、授業ができないといった例、高学年のベテラン教師が学級経営によるストレスから心身症を呈して入院するなどの事例が頻繁に報告されている。

では、こうした学級の「荒れ」、すなわち学級崩壊とはどんな状況をさすのかに触れてみる。

例えば、「新しい荒れ、学級崩壊の現状に関する調査研究」松浦義満他（1997）によれば、小学校においても「授業中の友達を叩く行為」「立ち歩き」「物を投げる行為」など中学校と比較しても大きく変わらない傾向が報告されている。その他――

- ・始業に際して学習準備をする気がない
- ・教師の叱責に反抗・テストや配布物を破く
- ・授業中に教室から出ていく
- ・教師が注意しても私語が止まない等々

従来、学級崩壊は反社会的な問題行動との関連から扱われてきたが、最近の状況はこれに加えて低い年齢層に新しい態様で登場してきている。常識的には、なんとかなりそうではあるが、その影響は決して軽微とは言えず、地域や学校の実態によっては深刻な事態に発展している。

では、古い態様の学級崩壊（以前はこのように命名されてはいない）、いわば学級の荒れと言われた反社会的な問題行動による学級崩壊は無くなったのかということ決してそうではない。むしろ増加の傾向にあることを現場の教師や統計報告によって確認することができる。

## (2) 学級の文化構造の視点からみた崩壊

学年・学級によって態様の差はあっても、崩壊した学級、崩壊途上にある学級には共通して以下のような文化的な特徴が見られる。

### ①目標の不在／喪失

学級における上位・下位目標の不在または喪失。内面化されず、実践されていないという知覚が子供たちに蔓延している。

例えば「名札をつけよう」という目標が設定されても手だてが不明確であったり、教師の支援が不足していたりすると、徹底しないという事実だけでなく、学級の取り決めや教師の指示に対して取り込み、内面化する基本的な態度が形成されなくなる。

#### ②無力感

学級の中では、何も為し得ないし、その必要性も感じていないという知覚。物事への失敗の累積が、担任や学級のリーダーを中心にした求心力を崩壊させてしまう。

(頼れない担任、正しいことなど何もない、一生懸命やってもなにも得られない)

#### ③規律の不在／喪失

実際にある「きまり」が反故にされていたり、学級内の様々な社会関係の秩序が維持されていない(無法地帯である)という知覚。一見自由であるが、子供たちの学校生活は、教師の支援による一定のルールによって動いていないために力の強い者が弱い者を支配する学級構造が形成される。一部の教師はこれを子どもの自主性を生かした民主的な学級、規則のない学級と胸を張るが、実際のところただの暴力的な烏合の衆であり、暴走族のような凝集性や規律すら見られない集団である。

#### ④成員の分裂

学級の一人ひとりがお互いに頼れない、相互に期待や信頼の対象にならないという知覚。

さらに進行すれば互いの敵意すらあるという知覚。子供同士、子供と教師間の伝達機能が失われている。また、教師は「あてにならない存在」として知覚されている。

#### ⑤不安の拡大／不安定感

学級に所属することによって得られる安定感や喜びが無く、所属していることがかえって不安・不安定感・不満などを亢進しているという知覚。学校に持ってきてはいけない物を見せびらかしたりする刹那的な喜びを追い求めたり、無軌道な行動や怠けなど、子供らしい活発さがみられなくなる。

### (3) 子どもの心の背景

#### ①家庭の問題

少子化、核家族、消費社会、情報化社会のうねりの中で、家庭が多くの問題を同時並行の型で抱えていることが多くなっている。私事化社会の進行は、本来ならば社会の中であって個人の価値観やライフスタイルが確立した好ましい状態を指すものであってほしい。

しかし、実際には自己の欲求の突出や自己を制御できない未成熟な大人が多く見られるようになってきているのが現実である。

学校の子供たちを観察していると、子育てにおける影響は、こうした背景のもとに過保護や過干渉、拒否や放任が子供をして従来の教師の物差しで測れない、理解できない人格として教師の前に登場するといえそうである。例えば——

- ・怖い者知らずの子供——叱られたことがない

「先生なんか怖くない、手を出せばお前がやめさせられるんだ」

- ・欲求不満耐性が欠如した子供

（興味のあることしかしない、しかし、それも長続きしない）

- ・大人に命令する子供——大人も子供も同じなんだ

（子供にかしづくことに喜ぶ大人、依存したり、尊敬することを知らない子供）

- ・親の学校に対する「軽視」をそのまま表出する子供

（学校では親の悪口、家庭では先生の悪口、自分に都合の良い方に柔軟に態度を変えるためどちらとも信頼関係が作れない）

- ・集団の一員としてではなく、教師との二者関係を執拗に求める子供

（私はここに居る。私を見て。）

「公園デビュー」の呼称にみられるように、子供が社会との関わりを持つ場面で親が我が子を世界の中心に捉える傾向が顕著である。デビューは個にスポットライトを当てることである、しかし入園や入学はそもそも「その他大勢の一人」としての通過儀式的側面を理解しておくことも必要であるが、到底それができない。さらに、最近の家庭では親が子供の奉仕者に成り下がってしまう地位の逆転が増加している。そのため、子供は自分を取り巻く人々の中で誰が自分を保護してくれるのか、誰を敬わなければならないのか、依存する対象の認知ができなくなってきている。

現代の家族には、心から入るしつけも型から心を育てるしつけの両者とも大きく後退していると言えよう。民主主義や個人主義を悪用したその「つけ」は未来社会において今の子供たちが自ら支払うことになりそうである。

## ②保護者の特性の問題

入学式や授業参観で来校する保護者の行動をみると、学級における「荒れ」の要因の一端を直感的に捉えることができる。

授業参観中の親の私語、廊下での井戸端会議等々、担任が授業を中断して保護者に入室を促したり、授業中に管理職が全校放送での注意を促すなども今ではめずらしくない。

集団より個が大切にされた教育を受けた世代に進行した私事化現象における欠点の再生産が新しい問題を生み出している。

また、カウンセリングの事例では、例えば離婚による心的外傷や経済的な困窮、子育てへの不安、夫婦間の葛藤など様々な問題を抱えている家族、いわゆる多問題家族が増えているとともに問題の根深さも目立ってきている。

学校の教師はこうした背景を背負った保護者と様々な問題解決にあたらなくてはならない。

従って、従来の教師と保護者の関係を前提にしたのでは解決は難しい。ベテラン教師に学級崩壊をこじらせる傾向がみられるのはこうした要因が作用していることも考えられる。

#### (4) 教師の資質・指導力の問題

##### ①担任の問題

後藤成美は「現代ほど、教育者の指導目標が不鮮明で、自信が欠如し、右顧左便舁して表面を取り繕い、ことなかれ主義に陥っている——」と指摘している。

保護者の学校に対する教育サービスへの要求は時に神経症的なまでにエスカレートする現代において、教師が抱えるストレスは相当な域に達していると考えられる。

また、教師を目指した者にとって様々な制約と看視の中で自らのキャラクターや哲学に基づいた教育理論・方法を駆使して教育活動を実践できないことは苦痛以外のなにものでもないことも事実である。現代の教師ほどその教育活動を支える後ろ盾を失っている者は無いとすら言える。

後ろ盾、つまり支援体制とは、教師の心にゆとりと自信を生むバックボーンである。具体的に言えば保護者や同僚、学校の管理職であり、教育委員会であり、議会であり、またこれらを支える市民社会、すなわち了解事項（文化）の質である。党利党略のための教育問題、まして票集めのために教育問題が論じられることなど、教育にとっては天敵以外のなにものでもない。従って、これらに物差しを当てて何が問題でなにが目的とされているかを測るのが健全な市民社会の重要

な役割である。

加えて、教師個々の後方（家庭）の支援体制の不足が自信喪失・ことなかれ主義を生み出す要因のひとつとして考えられる。この後方に揺らぎがあるのも現代人の特徴であり、教師もまた例外ではない。個人的な悩みや過重な問題を背負いながら仕事に従事している教師が多いことがカウンセリングの現場からも報告されている。

こうした、教師の心の問題を背景にして問題を抱える子供の数が学級の中で一定のラインを越え、教師のキャパシティとの均衡が破られた時に学級崩壊が加速する。

## ②教師集団の問題

一枚岩方式と言う言葉が昭和50年台の前半によく使われた。当時、中学校の荒れに対応するために生まれた言葉である。

学級崩壊が進行し始めると担任教師は一人ぼっちになり始める。この傾向は学級王国に陥りやすい小学校に顕著であり、他の教師に相談や援助を求めることがためられるのである。

これは、日頃の職員室の人間関係が大きなポイントになるが、①で示したように教師もまた現代人の特徴である私事化が進んでおり、集団内での協調が不得意になりつつある。従って、同僚の教師が外から崩壊のサインを発見しても手が出せないままに放置される事例も多い。

問題を一担任に止めず学年や学校全体の問題として受け止めることが大切である。このことは、当該担任の支援体制を確固たるものにして取り組みの効果を上げるために必要な条件となる。

## ③管理職の問題

学級崩壊へのメスの入れ方は「きれいごと」ではすまない側面を持っている。また、担任教師の指導力や資質に原因を帰属させたり、保護者の実態を嘆いても始まらない。

崩壊のサインが出始めた段階で、学年の指導体制の再編を図り、学校全体の取り組みとして受け止めて当該教師の支援体制を作っていくことが必要である。

もっとも、日頃からこのような体制が組めていれば、学級崩壊はかなりの率で抑止されるはずである。従って、日頃からこうした体制が組めない何らかの学校の事情（多くの場合、人間関係やモラルの停滞）にメスを入れることになる。そういった意味で「きれいごと」ではすまないのであり「こうすればいいじゃな

いか」と言った単純な方程式を解く訳にはいかない。

また、当該の担任は、学級崩壊の入り口で既に過重な悩みを抱えており、鬱状態になっていると考えるべきである。心身症状に進む事例も多いので十分なケアをする必要がある。

## 2. 学級崩壊の中で生活する子どもにどんなことが起こっているか（崩壊の結末）

学級の崩壊が、子供たちの人格形成にどのような悪影響をもたらすのかについていくつかの研究報告から紹介しておきたい。この調査は首都圏の小・中学校36校、約3,500名の5年生から中学3年生までの児童生徒を対象に（ ）に表示した因子構成で筆者が実施したものである。調査時期は1981年であるが、調査対象の児童生徒が現在の低学年児童の保護者の世代であることに注目したい。

その結果、学級崩壊、学校崩壊群の児童生徒と統制群児童生徒の間に以下の因子に有意の差が見られた。なお、同様の尺度で教師にも実施した結果、児童生徒の傾向と教師集団の傾向に高い相関がみられた。このことは学級崩壊、学校崩壊群の児童生徒集団と当該の教師集団が同様に「荒れ」の症状を呈していると見ることができる。

### (1) 非民主的集団特性の芽生え

崩壊学級の児童生徒には、次のような人格特性が強調される傾向がみられた。

#### (反民主主義的攻撃性)

因襲的な価値観を侵す者を看視、非難、処罰しようとする態度が見られる。

いじめや仲間外し、正しいことを主張したり、行動する者を引き下げる行動にでる。

#### (破壊性シニシズム)

人間をけなし、蔑視する傾向や一般化された敵意。

「嫌い」「おやじ」「うざってえ」「きもい」などで表現される。実際に喧嘩も多発する。

#### (反民主主義的服従性)

内集団の理想化された道徳的権威に対する服従的、無批判的な態度

仲間内はあうんの呼吸で良いことも悪いことも、議論したり考えたりすることを嫌う。

#### (因習主義)



因襲的、中産階級的な価値観へ固執する傾向

(反内省主義)

主体的、創造的、柔軟な考え方ではなく偏見と反意の傾向

(ステレオタイプ)

運命的な信念体系を持ち、柔軟性のない狭い範囲で思考する傾向

親はこういう者、先生はこういう者、大人はこういう者、人生はこういうものといった偏向した信念を持ち、排他的である。

(権威主義)

学級崩壊に陥ると当然その核となっている児童生徒に指導の焦点があてられがちになるが、一方でもの言えない弱い子供たちの中には権力や絶対的な力へのあこがれが浸透し始めている。狼狽する教師、あるいは無気力な状態の教師と荒れる学級生活の毎日の中で「自分に力さえあれば、彼らを徹底的に叩きのめす」といった、支配と服従、強者と弱者といった二分法的な先入観と、力を強調する権威主義の原型が作られていく。

### 3. 指導上の留意点

学級崩壊は原因、過程、症状によって様々な態様があり、その対応は一様ではない。

ここで示すのは、その一例であり参考にして実態に応じた創意と工夫が加味されることが必要である。

#### (1) 実体の正しい把握とビジョン&ストラテジー

学級崩壊を抑え、正常な学級への再生を図るためには、漠然とした問題把握や指導プログラムでは到底効果を上げ得ない。

崩壊の程度にもよるが、十分な実態把握と長期的、短期的指導計画の複数立案と再生後のビジョンを担当が明確に持ち、学級の児童生徒の発達段階に即して子供たちにそれを明示する必要がある。

これは、子供とともに学級を変えていこうとする教師の並ならぬ決意と覚悟の表明であり、この段階で子供たちから同意と賞賛が得られることを期待してはならない。たとえ一方通行、のれんに腕押しのように感じられても、子供たちの意識の中には確実に教師の気持ちが刷り込められているはずである。それが子供の意識や行為に至るには教師の継続が分岐点となる。

何も言わずに先生が急に厳しくなったり、優しくなったりでは子供たちは混乱

するだけである。また、プログラムの未完成段階で思いつきの決意を表明しても決して長続きしない。

## (2) 指導計画（プログラム）の作成

プログラムは2-(1) で示した崩壊学級の各々の特徴に対してどのような取り組みを充てて解消していくかがポイントになる。担任教師の特性や学校の体制が影響してくるところである。いわんやこれが組めない事情を抱えた職員室の文化が学級崩壊を助長していることもある。

プログラムの策定は、チームワークを前提にそれぞれの教師の得意とする領域を生かしたものが効果的である。そして、それは単線型ではなく、複線型で実施する方がより大きな効果が期待できる。

例えば、

○保健体育科・学校行事・児童生徒会活動 ○集団づくり・卒業対策・クラブ活動

○清掃活動・授業ルール・表現活動

○修学旅行・体育祭種目・ボランティア

等々、当該の学年学級の実態に即して、これらの取り組みを通して、目標の設定や無力感の除去や所属意識の回復をいかにして進めていくかを、短期的、長期的、段階的に組むことが必要である。

## (3) 指導法の改善と選択の柔軟性

「金八先生」の手法が全能であるはずがない。また、ロジャーズの自己理論に基づくカウンセリングの手法が万能ではない。「義理と人情」の熱い体育会系生徒指導が全てでもない。

しかし、こんな簡単なことが意外に理解されていないし、実践されていないのが現状である。誰もが得意領域を持っているものである。しかし、特定の手法を金科玉条にしたり、他の教師の特性に排他的になったりすることは内科の医師が脳腫瘍の手術をするに等しい過ちを犯すことになる。

学級（相手）の状況によって教師は時に戦略（プログラム）を立て直さなければならぬし、手に持つ武器（教育アセスメントの方法）を柔軟に選択することが必要である。

指導法は過去の失敗を十分に踏まえて、状況に応じた指導法を段階的に縦横に駆使する必要がある。例えば、

・対決する強い指導から許容する優しい指導、あるいはその反対の型へ

- ・訓練から支援、あるいは支援から訓練へ
- ・個別指導から集団指導あるいは集団指導から個別指導へ

といった幅の中で行うことが大切である。しかも、指導場面によってその時々に応じて駆使されなくてはならない。つまり、教師の指導に関する基本的な信念を長期的計画の中に生かすことは当然必要であるが、段階的かつ短期的指導計画における再生指導は、学級の状況に応じて柔軟に変化すべきである。

#### (4) 着手の順位を決めて年間を俯瞰する

学級崩壊はいわば瀕死の状態と考えてよい。例えば脳梗塞で瀕死の患者が救急病院に運ばれたとしよう。医師はその患者の危篤は肥満が原因だとして食事療法を指導することはしない。まずは呼吸の確保や心臓の鼓動確保を先に行うはずである。

常識的なことではあるが、教育の領域では意外にこれがなされない場合が多い。

以前、崩壊した学級に新担任として着任した教師が短期的プログラムの中に学力の向上を提案した。学力は極端に落ち込んでおり、子供たちの「どうせやってもできない」といった無力感を何とか回復させたいとの願いが提案に込められていた。

しかし、周囲の教師たちは、当時、偏差値アレルギーが支配的であったこともあり早速「ほんとうの学力とはなにか」の議論を延々と始めたのである。

こうした議論は誤りではないが、このような場面では明らかに誤りである。その結果、せつかくの取り組みも効果を上げられずに毎年同じ失敗することが多い。なにが緊急でなにが重要かを判断できない組織には学級崩壊を再生させる力は無いといっても言い過ぎではない。むしろ、問題を転嫁することは教師によるネグレクトに等しいと考えられそうである。

#### (5) 授業がすべてという陥穽

学級崩壊は多くの場合、授業以前の問題が焦点になる。従って授業だけに焦点を当てた対応は必ずしも効果を上げない。わかりやすい授業を実現すれば再生可能でと考える大きな誤解であり、「きれいごと」に終わることが多い。それだけをしていればとりあえず教師の責務は果たしたとの勘違いは避けたい。

学校は授業で勝負と言うがこれには深い含蓄がある。授業時数の消化や進度の丁合をいうだけでなく、教師の教育信念やキャラクター、高度な授業技術等々の主要な価値が生きている「めりはりのある授業」を指すのである。こうした授業はプログラムの中でも中核を占めるものとなる。加えて、授業の成立とは教師と

児童生徒の間に信頼感のみならず、一定の道徳的関係が成立していることが条件となる。

教室の後ろで喫煙したり、騒いでいる中で淡々と授業をしている教師の姿はむしろ滑稽である。彼の行う授業は「授業がすべて」という高尚な理念とはかけ離れた位置にある、むしろ消極的な防衛機制による行為にすぎない。

#### (6) チームワーク

プログラムが複線型になれば、それぞれに教師の得意不得意が出てくる。また、指導上の得意不得意だけでなく、教育上の信念や方法上の好き嫌いが表面化する場合が考えられる。

しかし、見方を変えれば、幸いなことに学校には様々な特色を持った先生たちが協働しているはずである。声の大きな先生もいれば優しい声の先生もいる。遠足や運動会となれば燃え上がる先生、授業研究となれば寝食を忘れる先生もいる。生徒指導が歩いている先生もいれば、教育相談こそ教育の真髄という先生もいる。

互いに補完しあうことで教育効果を倍増させなければならない。当たり前のことだが、職員室の雰囲気によっては、ここがネックとなってプログラムを推進しようとする教師が針のむしろに座ることも起きる。

#### (7) 保護者への説明・アカウンタビリティ

プログラムの推進は学級崩壊の意識のない保護者にとっては、担任による教育方針の無謀とも思える変化としてしか捉えられない。これでは逆効果である。

子供たちに対して担任がその決意を示したのと同様に、状況を説明して把握してもらい、今後の協力を取り付けて教師の円滑な動きを確保しておく必要がある。

#### (8) 学校のスリム化—保護者の参加

また、保護者にできることを明確して分担し、教師がなにかも抱え込まないことが大切である。抱え込まないとは捨ててしまうことではなく、子供にとって最も影響力のある母親と父親を巻き込んでその力を有効に生かし、取り組みの効果を促進させるのである。

#### (9) バリアフリーな学校へ

そのためには、学校を開き、学級の実態を観察してもらい、事態の重大さに気づいてもらい、協力への動機づけを強化する必要がある。但し、学校がただ単に困っていると親のしつけへの攻撃的な意識で、プログラムを持たずに保護者に開放しても、プロとしての指導能力に対する批判が集まるだけで何の効果も得られない。

## 4. まとめ

### (1) 総合的な学習の時間への期待

プログラムの実施には、教育課程上の時間の確保が必要である。現行の枠の中では、特別活動が妥当な時間となるが、平成14年度からスタートする新しい学習指導要領に位置づけられた総合的な学習の時間はこうしたプログラムの推進に有効である。

学校の実態に応じた、創意と工夫が盛られた横断的な学習の時間が保証された訳であるから、学校の実状によっては、プログラムの趣旨と一体化する。視点を変えればこのプログラムは豊かな心とたくましい生きる力を育む開発的なプログラムでもある。そうした意味でこの総合的な時間の設置には大いに期待するものがある。

### (2) 学級崩壊は市民社会の多機能不全のサイン

教育システムや社会全体の歪みのなかで登校拒否やいじめが芽を出したとすれば、学級崩壊はいわば個別的な問題から集団全体に波及した末期的症状である。

いくら「心の教育」を叫んでも、叫ばなかった時代の方がより「心豊かな人間関係」があった事実によく出会う。例えば、障害を抱えた生徒をいじめの対象としたりする学級など、昔も確かにあったが、先生のリーダーシップで学級の目が覚めたり、勇気ある者が手を挙げてみんなを導いた場面を経験している。

25年前の小学校の教え子達の同窓会が毎年開かれている。この学年には肢体不自由のA君がいる。彼は今でも自力での歩行が困難である。級友は居酒屋への出入りには彼を背負い、そして送り届ける、25年前の光景と変わらない。

一方、最近の相談の中で、某中学校の学級では背が低い、顔がおかしいといじめられ、不登校そして脱毛症になった生徒と面接をした事例がある。

担任は今時、生徒の人権を考えると強い指導などとてもできないとうつぶしている。予想はしていたもののおかしな教育である。いじめの現場で生徒の胸ぐら掴んで「君は間違っている」と教師が怒りをぶつけることはもはや指導ではないと言うのである。

「何かおかしい」と思いつつもこうした風潮が支配的であることに間違いはない。中学校の教師が手を後ろに組んで生徒から殴られている光景も実に異様である。中学生達は教師が手を出すことを挑発している。彼らは教師が手を出した瞬間に議会も親も世間も全てが自分の味方につくことを知っているからである。節操も

なく味方につく、これが現在の市民社会の了解事項（文化）なのか。

教育はまさに人間同士の営みである。その関係の経緯は絵に描いたような温かい信頼感だけではない。両者が激しくぶつかり軋む時もある。豊かな日本は妄想に近い人間観、教育観、指導観を持つことで親や大人、そして市民社会が善良でありたい、やさしい人間でありたいというアイデンティティーのためにどれだけの犠牲を払えばよいのだろうか。

## 参考・引用文献

- ①「教育アノミーと教育相談」 1990 後藤成美 門土社
- ②「新しい荒れ、学級崩壊の現状に関する調査研究」1997  
松浦義満他 和歌山大学
- ③「生きる力を育てる支援・指導に関する研究」 1996 柳生和男  
—教育アノミーを克服した指導モデル—  
全国教育研究所連盟全国大会奈良大会
- ④「教育における疎外と連帯の研究」 1982  
柳生和男 兵庫教育大学修士論文  
—学校社会へのアノミー論的考察—
- ⑤「非行兆候およびその原因・背景に対する教師のとらえ方の研究」(1)(2)(3)  
1998 柳生和男他 第31回日本カウンセリング, カウンセリング学会